

# ニッポンの ロックビリー

## 第二回 日本人で初めてグラント・オール・オープリーに出演した男 大野義夫

大好評のこのコーナー。今回はかのグラント・オール・オープリー・ショーに初めて出演し、大喝采を浴びた日本人のお話。ナッシュヴィルの観衆はエルヴィス・プレスリーより大野義夫を受け入れました。 文：船橋羊介(706 union)

テネシー州ナッシュビルで1925年から続く最も歴史が古いカントリーライヴラジオ番組「グラント・オール・オープリー・ショー」。ハンク・ウィリアムズ、ロイ・エイカフ、カーター・ファミリー、ビル・モンローら大御所達をはじめエルヴィス・プレスリーも駆け出しのころ出演。1950年代にはカントリー系のショーは多数存在していた。ルイジアナ・ヘイライド、ビッグ・D・ジャンボリー、タウン・ホール・パーティー等。どのショーもムーヴメントに乗ってロックンロール系のアーティストを出演させる中、グラント・オール・オープリーは全くぶれずカントリーに固執した。言い換えればカントリー界で最も敷居が高いショーであった。エルヴィスはこのグラント・オール・オープリーに出演、司会者のジム・デニーに「メンフィスに帰ってトラックドライバーに戻った方が良い」と酷評されて泣きながら帰ったという逸話が残っている。エルヴィスをも認められなかったこのショーで大絶賛され

た日本人がいる。

大野義夫は1931年東京・杉並区で生まれた。戦後、敗戦国の日本に多くのアメリカ文化がドッと押し寄せた。大野が夢中になったのはカントリーだった。法政大学入学と同時にウエスタン・ジョリーボーイズを結成し、六大学音楽リーグ戦、米軍キャンプ等で活躍。その後、多くのバンドを経て、1957年3月、堀威夫

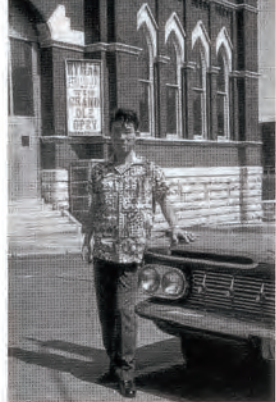
とスイング・ウエストに清野太郎、寺本圭一らと共にヴォーカル&バンジョーで加入。1958年第一回ウエスタン・カーニバルより連続出演。1959年ワンダ・ジャクソン来日時にはバックバンドを務めている。

1959年7月、大野は運命のパトリック・マネージャーとの出会いを果たす。エルヴィスで言えばパーカー大佐、ビートルズならブライアン・エプスタイン、大野にとってはジョン・ベスパーだった。オーストラリア人のジョン(当時はパンアメリカン航空勤務)が初めて大野を観たのは、青山でのウエスタン・コンサート。2人はすぐに交流が始まり、やがてジョンは友情の証として新品のバンジョーを大野にプレゼントした。それはブルーグラスでよく使用される5弦バンジョー(当時、大野は4弦テナーバンジョー)だった。当時の日本では珍しく、弾き方が分からず宝の持ち腐れになっていた。しばらくしてジョンから何故バンジョーをステージで弾かないのか聞かれた大野は日本にはこの種の先生がいない事を力説すると、良い先生がシドニー



レスター・フラットとオール・スクラッグスのフォギー・マウンテン・ボーイズの面々をバックに「コロムブス・スタックイッド・ブルース」を歌い拍手喝采を受け、この番組では珍しいアンコールも披露した。





アール・スクラッグの1800年代に建てられた家に大野は滞在し、バンドのみならず深い友情関係を築いた。

グランド・オール・オープリー・ショーが開催されるライマン公会堂の前で。

にいるから習う気があるかと尋ねてきた。こうして大野はまずオーストラリアに行くことになった。オーストラリアでの修行中、新聞に「日本からバンジョー修行に来ている日本人のシンガー」という記事が掲載され、テレビ出演依頼が殺到した。そうこうしてる間に音楽学校も1959年12月に無事修了し、5弦バンジョー弾きのスタイルが完成した。

1960年、日本に戻ることなく、そのままオーストラリアから船でハワイに渡航。そこで3か月間オアシス・ナイト・クラブ(翌年清野太郎も出演し滞在中のエルヴィスに面会)で演奏をした。同年3月、ハワイからアメリカ本土入り。シアトルでバンジョーの先生ウィーラー氏に教を乞った。厳しいレッスンを受け、レパトリーはさらに増えていった。

そして4月初旬、突然のビックニュースが舞い込んできた! ジョンから大野のグランド・オール・オープリー出演を決めたという連絡が来たのだ。大野は当時を語る。「オープリーを観に行きたいぐらいに思っていたのが出演という話をもら

い、嬉しさを乗り越えて歓喜よりも驚異を感じ、正直戸惑ったよ。」グレイハウンドでいざナッシュビルへ。ナッシュビルではアール・スクラッグス氏が大野を迎えた。ビル・モンロー&ブルーグラス・ボーイズに在籍したアール氏が1948年に組んだバンド、フォギー・マウンテン・ボーイズが大野のバックを務めるという物凄い事が実現したのだった。大野はグランド・オール・オープリーの出演前にライヴツアーにも参加。この道中ですっかりメンバーとも打ち解けたのだった。

そして、いよいよ運命の5月7日。大野が出演するグランド・オール・オープリーの当日を迎えた。AM7:30にショーは始まりジム・リーブスらを筆頭にプログラムが進行。大野の出番の前、司会のティー・トミーは

こうアナウンスした。「皆さん、今夜ここで珍しいゲストを御紹介致します。はるばる日本からナッシュビルを訪れた青年で、名前はヨシオ・オオノ。私自身、数日前から付き合っておりますが、大変内気ではにかみやの私達がいつも隣りの家で見掛けるごく普通の青年で、何等変わった事はありません。日本においてはエルヴィス・プレスリーと同じような人気を持つ彼は、驚いたことにアール・スクラッグスのレパトリーは殆ど演奏出来、そして唄う事が出来ます。私が「何処でフォギー・マウンテン・ボーイズのレコードを手に入れたのだ」と聞いたら、「東京の何処でも売っているさ」と答えました。全く驚いた事です。さあ、皆様とにかく逢ってやって下さい。ヨシオ・オオノです」

大野はその歴史的瞬間をこう振り返った。

「コロンブス・スタックエイド・ブルースのイントロが始まり、無我夢中、ただ力強く唄ったよ。ワンコーラスを歌ったところで直ぐに生粋のウエスタン・ソングと判った4000人の観衆は熱狂的な拍手をしてくれたんだ。そして最大の見せ場となるヨーデルパートに入り、得意の喉を披露すると、場内は歓声と掛け声・口笛で殆ど自分の声が聴き取れない程になっ



左から2番目がバンジョーの先生ウィーラー氏。彼のシャツはエルヴィスが監獄ロックで着たシャツの長袖ヴァージョン。



オーストラリアのテレビ番組に出演。ATNの「ユア ヒットパレード」、TCNの「バンドスタンド」等で人気を博す。

GREASE UP 豆知識

【バドワイザー缶】 飲んだバドワイザー缶を部屋に並べてる奴いたよね。セブンスター空き箱を並べてる奴もいた。今はもうないだろ。どのタイミングで片付けたのかな?





1958年スウィングウエスト時代のショット。3トップボーカル。寺本圭一、清野太郎と共に。スーツは浅草十字屋で仕立てていた。



1958年日劇ウエスタンカーニバルでのステージ。一番左が大野。ロカビリー三人男、山室信一郎と共に。基本大野はカントリースタイルだがロカビリースタイルの写真も残されている。

ていたよ。ツーコーラスに入る前、僕がタイミングよく「アーハー」と声をかけたので、場内はここでどっと爆笑。日本人が本場のウエスタンを唄うだけでたまげるのに、日本民謡の「アラエッサッサ」調子で「アーハー」とやったので彼等はまさかと思ったに違いないよね。レスターとアールの素晴らしいコーラスとバックに助けられて、唄い終わった時には前にも増して物凄い拍手！ 歓声！ グランド・オール・オーブリーはスポンサー付きで正確に放送されているのでアンコールは殆ど出来ないみたいなんだ。一度舞台の袖に引っ込ん

だ僕は、MCのティー・トミーに再び呼び出され、何かちんぷんかんぷんだっただけ、とっさに終りのヨーデルの部分唄い出したんだ。すると流石フォギー・マウンテン・ボーイズはタイミングよく、打ち合わせたかのようについて来て、これまたエンディングもドンピシャ。拍手！ 拍手！ 拍手！！ 一番前に座っていたベスパーさん（ジョン）も隣の婦人と手をあげて喜んでた。後から聞いてびっくり。その御婦人はエルヴィス・プレスリーのマネージャー、パーカー大佐の夫人とか！ もう汗びしょりで舞台裏に戻ったら、ハンク・スノウ、キティ・ウ

エルズ、ファリン・ハスキー等、カントリーファンなら羨ましい程の面々が、僕に握手を求めて来てくれたんだ。もうただ感激の余り「サンキュー」の繰り返しだったよ！

1960年にこんな偉業を成し遂げた日本人がいたのを皆さんご存じだっただろうか？ ご本人は軽く話しているがヨーデルは高度なテクニックを必要とする歌唱法だ。エルヴィス・プレスリーはカントリーシンガーを意識してファルセットを使用したことはあってもヨーデルは公式レコーディングで使ったことは一度もない。ブライアン・セッツァーもある程度

のキャリアを積んだうえでヨーデルを取り入れている。そんなヨーデルを格式高いカントリー界の権威のグランド・オール・オーブリー・ショーで披露して認められたという事実は、本当にとんでもない偉業だと心から思っ止まない。

大野義夫。現在88歳。現役のカントリーシンガーである。彼は今日もステージに立ち続けている。



1955年ワゴンマスターズの小坂一也と共に。マウンテンボーイズ時代。



1955年、17歳だったミッキー・カーチスが大野のバンド（マウンテン・ボーイズ）に参加。その後ミッキーはロカビリー三人男として一大ムーヴメントを起こす。